

1998.1

# 岡村昭彦の会

NO.7



## '97「夏季特別セミナー」報告

●いま、新聞報道はどうなっているのか…2

フリージャーナリスト 玉木 明

●教育者としてのAKIHIKO…11

批評家 米沢 慧

●コンピュータから見た人間の脳…24

紀行作家 本田成親

# いま、新聞報道は どうなっているの か

玉木 明

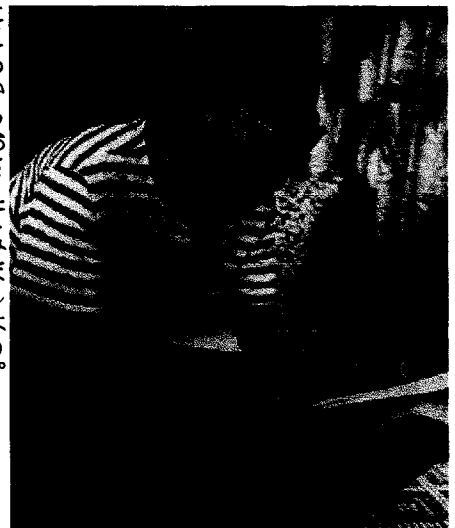
(たまたきあきら・フリージャーナリスト)

1

「いま、新聞報道はどうなっているのか」という仰々しいタイトルなんですけども、このところちょっとマスメディアの問題というのが、大変重要になってきているような気がしますので、きょうは新聞を中心にしたマスメディアのあり方についてお話ししてみようと思います。

日本の場合は、新聞がメディアの基本的なあり方を決定してきたという歴史的な背景もありますので、とりあえず新聞の問題を基本的に考えて、いまのメディアの状況を理解するひとつの考え方を話したいと思います。

基本的にニュースのあり方の問題なんです、このニュースというのは一体どういう性格を持っているものなのかという、基本的な



ところからおさえてみましょう。

これはわたしが言ったことではなくて、アルフレッド・シュツツという現象学的社会学者といったらいいのか、そういう人なんです、僕はニュースを考えると、基本的にその人の考え方に依拠して考えてきます。

その人の考え方というのはいわゆる日常生活、生活世界とかいう言われ方をしているんですが、これは自明性の世界と考えればわかりやすいでしょう。たとえばよくニュースを規定するときに「犬が人を噛んでもニュースにはならないけれども、人が犬を噛んだらニュースになる」という言い方があります。

犬が人を噛むというのは当たり前なこと、ありふれたことなんですけど、逆に人が犬を噛むとニュースになるということです。そう

いう意味で言えば自明性、要するに当り前なことがひとつ背景にあつて、その世界から逸脱したものがニュースであるという捉え方を一般的に思うんです。

太陽が地球を回っているというのはガリレオ以前だったら自明性の世界だったのですが、ガリレオが「地球が太陽のまわりを回っている」と言ったときには、これは相当なスキャンダルな話で、それはやっぱりニュースになる。要するに自明性の世界から逸脱したものがニュースであるという、そういう考え方をしたら非常によく解ると思うんです。

その自明性の世界というのがいわゆるニュースの背景と考えると、そこから逸脱して飛び出て、印付きになったものがニュースであると、そういう考え方になります。

これを僕は言葉の問題に置き直して考えてみたんです。そうすると、自明性の世界というのは、いわゆるわれわれの世界だということになります。一人称複数。その逸脱したものは、われわれの世界に属さない部分というのは、これはどうしてもわたしの世界、一人称単数。言葉の問題で置き直すとそういう格好になる。

たとえば太陽が地球のまわりを回っているというのが自明性の世界だとすると、ガリレオは「私はそうは思わない」と言ったわけで、どうしたって「私は」という言葉を使わざるを得ない。そういう文脈でないと、そのことが言えないという形になります。

ところがわれわれの世界というのは、たとえ「われわれは地球が太陽のまわりを回っている」と考える」というような言い方をしません。あるいは「われわれは1+1=2であると考える」というような言い方はしません。一般的に誰が考えても疑問の余地がないような場合は、「われわれは考える」という文脈が落ちて、「太陽が地球の周りを回っている」、「1+1=2である」という言い方をするわけなんです。

エジソンみたいに「1+1は何で2なの」という疑問を持つ人は、「私は1+1=2である」ということがわからない」という言い方になる。「私は」という一人称を設定しないとそういう言い方はできない。言葉の問題ではそういう不自由さがあるんです。

これをニュースの問題に置き直すと、無署名記事というのはどうしても「われわれは」というのが前提になるわけです。そうすると自明性の世界、当たり前前の世界が必ず前提とされているということになります。ここが一番問題と私は考えるんです。常に「われわれは」という文脈で、自明性の世界がいつも前提にされているというのが無署名記事の大きな特徴だろうと思います。

この無署名記事というのは、自明性の世界というのが非常につきりしている場合、確固たるそういう枠組みがあるときは、意外と効果的に作用すると思うんです。ところが最近これが崩れてきている。「われわれが」と

いう自明性の世界、だれが考えてもそう考えらるだろうという世界がだんだん怪しくなってきた。その辺の問題が新聞とかマスメディアが何かおかしいのではないかという問題と密接に結びついている。そういう状況的な要素もあると思います。

「われわれが」というのをいつも前提にしている記事のスタイル、これは言葉の問題が先なのか、それとも新聞の問題が先なのか、そのところは私もちよつとはつきりしないのですが、戦後、新聞が再発足する時にアメリカから入ってきたそういう考え方を、ここでシステム化したというところが一番の問題点だろうと思います。

そうすると「われわれの」自明性の世界と、そうでない世界がここではつきりと区別されてくる。いつも自明性の世界とそうでないもの、われわれに属する世界とわれわれに属さない世界というのがつきり区分されてくるという、基本的にそういう構造をもってくるわけです。ここところがやはり一番問題と考えていいと思います。

## 2

これは抽象的にいくら言ってもなかなかつきりしないので、具体的な新聞記事の例で見た方がいいと思います。

資料の1が署名記事の事例ですけども、これは毎日新聞のスクープで、大変大きな記事

です。当時、私もかなり注目した記事なんです。今年の1月6日の記事ですけど、いま話題を集めている安楽死の問題を扱った記事で、これが朝刊のトップ記事に出ています。普通こういう記事がトップになることはありません。社会面のトップになるのはよくあることですが、1面のトップというのはまずありません。だいたいここは日本の政治、「総理がどうしたこうした」とか、あるいは国際社会の問題とかが1面にくるんですけど、毎日新聞はこれを、一番最初の1面のトップに持ってきています。

最近どの新聞もみんな同じような記事になるというので、とにかく横並びの記事をやめよう、そういう新聞の作りをやめよう、さら

97.1.6毎日

牛かすのがつらい

迷路の中の「8カ月」

植物状態 83歳の老翁 中断死